

広域基幹施設と通所介護施設の利用特性

—山口県阿武町における高齢者福祉施設のネットワーク構築に関する研究 その1—

正会員 ○中園 眞人*
 正会員 三島 幸子**
 正会員 山本 幸子***

地域福祉施設 高齢者デイサービス 空き家活用
 施設立地 利用圏

1. 序論

過疎地域の自治体においては、地域の人口減少と高齢化の同時進行により、高齢者の暮らしを支援する医療福祉需要増大への対応と、厳しい財政事情のもとでのサービス水準の維持向上という困難な課題を抱えており、既存建築ストックや地域の人材の活用による、人口定住と高齢者福祉の充実を含めたコミュニティ再生が重要課題となっている。こうした社会状況に対し、最近では既存施設や民家等を活用した小規模な通所介護施設の整備が進んでおり、軽費で開設出来る利点のみでなく、地域に根ざした福祉拠点としての有効性が注目されている。

小規模な通所介護施設整備の主目的である地域に根ざした福祉拠点としての役割を担保するには、個々の施設の利用圏を単位とした介護需要の的確な把握とサービス提供体制の整備と共に、広域基幹施設を含めた施設間のサービス機能・利用圏を分担する施設ネットワークを構築することが重要である。特に利用圏の広い過疎地域においては、今後の高齢者福祉サービス需要増大への対応、サービス水準の向上及び施設運営の効率化を目指す上で、地域施設ネットワークの構築が有効なシステムとして展望される。

関連する既往研究には、自立高齢者の地域施設の利用・活動分析から空間構成の要点を論じた研究¹⁾、高齢者通所施設の利用実態分析と使われ方の類型化²⁾や利用者の活動からみた空間のあり方を論じた研究^{3,4)}等の成果があり、民家を活用した小規模通所施設を対象にその意義を論じた研究^{5,6)}等の新たな展開が見られるが、既存建築を活用した福祉施設整備促進の観点からの研究は少ない。また地域福祉施設ネットワーク構築の課題に関しては、介護ニーズの地域性⁷⁾や地域資産との連携に着目しサービス供給体制を検討した研究⁸⁾等の蓄積はあるが、介護保険制度の導入を機に増加している小規模な通所介護施設の立地集積効果と、広域基幹施設を含めた地域福祉ネットワークの構築方法を対象に、地域施設計画の観点から取り組んだ研究は少ない。

山口県阿武町では広域基幹施設として養護老人ホーム、デイサービスセンター、在宅介護支援センター及び特別養護老人ホームが建設され、その運営組織として社会福祉法人「阿武福祉会」が新たに設立された。その後同法人により民家を活用した小規模な通所介護施設(以下小規模施設と略称)が3箇所開設され、過疎地域における広域基幹型施設と小規模施設による高齢者のデイサービスネッ

トワーク構築を進める先進事例^{注1)}として注目される。そこで本研究では阿武町を対象に、広域基幹施設と小規模施設の利用特性と使われ方の比較分析をもとに、ネットワーク形成効果を明らかにすることを目的とし、その知見をもとに普遍化に向けた展望と課題を考察する。

調査は第一に広域基幹施設と小規模施設の設立経緯及び運営方法に関する社会福祉法人担当者へのヒアリング調査^{注2)}と、建築概要に関する資料収集及び実測調査(地図・建築図面収集、敷地周辺及び施設平面の実測調査・写真撮影)^{注3)}を実施した。第二に施設利用登録者データの収集^{注4)}と各施設の使われ方調査を行った。

2. 阿武町の概要と人口の推移

2.1 阿武町の概要

奈古町・宇田郷村・福賀村の3町村が1955年に合併し阿武町となる。日本海に面した中山間地域で、農業・林業・漁業を主産業とする典型的な農山漁村地域で、現在は国道191号沿線の平地部に奈古地区の中心市街地が広がり、JR奈古駅・町役場を中心として、保育所・小中学校・高等学校を始め、文化ホール・武道館等の公共施設や郵便局・農協、民間医療施設、購買施設等が集積立地し、全町の中心地区として機能している。また隣接する湾岸地区には奈古漁港と集落が立地し、スポーツ施設や道の駅の整備も進められている。

宇田郷地区は日本海と国道191号に挟まれた元浦・今浦漁港と漁村集落を中心とし、周辺の丘陵地帯に農村集落が広がる地域である。町役場支所、郵便局、漁業組合、漁協・農協購買施設、旧小学校が平地部の中心地区に立地するが、民間店舗は7店舗と少ない。またJR宇田郷駅が国道沿いに立地するが、中心地区からは0.9Kmの距離がある。福賀地区は山岳・丘陵地域が大半を占め、比較的広い盆地に福田上・下と宇生賀の中心集落が立地する。両集落とも町中心市街地からは約2.5Kmの距離があり交通の利便性が低い。福田上・下集落には役場支所、小中学校、郵便局、農協購買施設等が立地するが、民間店舗は14店舗と少ない。これらの中心集落以外は山岳・丘陵地谷間の農地周辺に小規模な集落が点在している。

2.2 人口の推移と高齢化の動向

高度経済成長期の1960年代以降人口減少に転じ、特に1955-1970年の15年間に、10千人から7.4千人へと3.3千人減少した(図2)。その後も減少傾向は継続し、7.4千

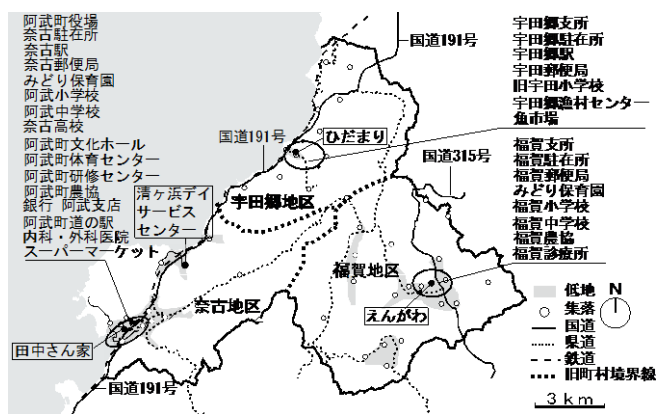


図1 対象地域の空間特性と主要施設

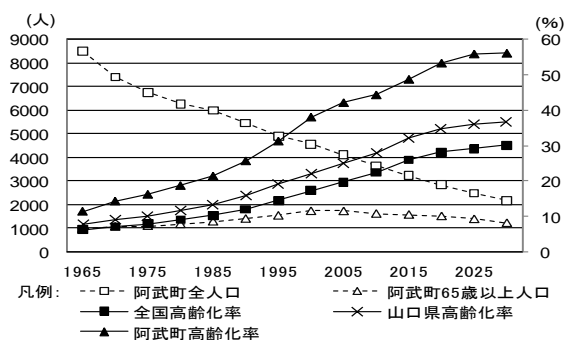


図2 阿武町の人口と高齢化率の推移

人(1970)から4.1千人(2005)へと35年間に3.3千人減少している。これに対し65才以上の高齢者は農村地域のため社会増減が少なく、1965年以降一貫して増加傾向にあり968人(1965)から1737人(2000)まで増加している。町の総人口が減少する中で65才以上の高齢者人口のみ増加したため、高齢化率は1965年の11.4%から38.1%(2000)へ上昇しており、山口県平均(22.2%)や全国平均(17.3%)と比較しても高齢化の進行が著しい地域である。2000年以降高齢人口は緩やかな減少に転じているものの、高齢化率は2010年には44%に、さらに2025年には56%に達すると予測されており、今後も高齢者福祉サービスに対する需要は増加するものと考えられる。

3. 阿武町における福祉施設整備プロセス

3.1 広域基幹施設の整備

1997年の介護保険法制定を契機に、制度導入に向け既存老人ホーム(1961建設)の建て替えを中心とする本格的な福祉拠点施設整備計画が策定された。表1に施設の概要を示すが、1998年には養護老人ホーム「清光苑」、デイサービスセンター及び在宅介護支援センターが設立された。2000年にはユニットケアを全面的に導入した特別養護老人ホーム「恵寿苑」が新設され、高齢者養護施設の整備水準は質・量ともに飛躍的に向上した。さらに2005年には木造平屋建てのグループホーム「であい」が新設され、阿武町のみでなく周辺地域をも含めた広域的な高齢者福

表1 広域基幹施設の概要

施設名	清ヶ浜 デイサービス センター	清ヶ浜 ヘルパー ステーション	養護老人ホーム 清光苑	特別養護 老人ホーム 恵寿苑	グループホーム であい
構造	RC造平屋建	RC造平屋建	RC造平屋建	RC造平屋建	木造平屋建
延床面積(m ²)	605.7	46.3	2433.9	2630	321.9
開設時期	1998.4	1998.4	1998.4	2000.3	2005.3
主要な室名	機能訓練室・食堂 静養室 事務室 特別浴室 一般浴室 車いす用トイレ	ヘルパー ステーション	居室 食堂 静養室 事務室 浴室	居室 食堂 リフト浴室 一般浴室	居室 食堂 浴室
営業日	月～土	月～土	月～日	日～土	日～土
営業時間	8:30～18:00	8:30～17:30	24時間	24時間	24時間
利用者数	58	18	50	50	9
スタッフ数	11	6	23	64	8

表2 小規模施設の概要

施設名	えんがわ	ひだまり	田中さん家
構造	木造2階建	木造2階建	木造2階建
延床面積(m ²)	283.5	129.4	119.6
改修費(万円)	240	850	0
開設時期	2006.6	2008.6	2008.6
営業日	火～日	日～金	月～土
営業時間	8:30～18:00	8:30～17:00	8:30～17:00
サービス内容	送迎、食事、入浴 アクティビティ	送迎、食事、入浴 アクティビティ 介護予防	送迎、食事、入浴 アクティビティ
利用者数	24	19(17)	26
スタッフ数	5	4	4

注: ()は介護予防の人数を示している

祉拠点としての役割を担うに至っている。

これらの施設の一体的な運用を促進するため、社会福祉協議会とは独立して新たな運営組織「社会福祉法人阿武福祉会」が設立された(2000)。町の高齢者福祉を担う法人組織として位置付けられ、「公設民営」型の整備運営方式が採用されている。法人設立に当たり高齢者福祉分野の人材が運営責任者・スタッフとして新規採用され、その後の地域高齢者福祉事業推進の中核として活動しており、広域基幹施設の運営に止まらず小規模施設整備に取り組む主体ともなっている。

3.2 小規模施設の整備

広域基幹施設の整備が完了した後、阿武福祉会では小規模施設整備の取り組みを開始し、2006年に福賀地区に「えんがわ」を開設した。その後2008年に宇田郷地区に「ひだまり」を、奈古地区に「田中さん家」を相次いで開設し、合併前の旧3町村全ての地区に施設が整備されデイサービスネットワークが構築された。図1に施設の位置を、表2に施設概要を示す。

「えんがわ」は農家住宅を再利用した施設である。高齢者の住宅所有者が阿武福祉会運営の特別養護老人ホームに入所し空き家となったため、使用貸借契約を結び2006年6月に高齢者デイサービス施設として開設した。1993年築の農家住宅で、浴室・台所等はそのまま使用可能な状態で、建築時に手摺等の設備も設置されていたため、改修はトイレの水洗化・床張替え・プレイルーム新設・入口のスクロープ新設で済んでいる。定員10名に対し24名の介護

保険高齢者の登録があり、5名のスタッフが介護を行う。

「ひだまり」に関しては、高齢化が進行し空き家が多数存在する旧宇田郷村中心漁村集落の自治会の要望を受け、阿武福祉会が運営主体となる小規模施設の事業を展開するため、集落内の空き家を対象に施設候補物件の探索を開始し、集落内に住宅を新築したため空き家となっていた木造2階建て民家の借用が実現した。1階部分をデイサービス施設とするため、台所、浴室・洗面所、トイレの設備と1階部分の内外装が全面改修された。2009年11月時点の利用登録者は19名で、4名のスタッフが従事する。

「田中さん家」は町の中心である奈古地区に位置し、JR奈古駅・町役場・郵便局・医院・大型購買施設等に近接した利便性の高い場所にある。所有者が福祉会運営の特別養護老人ホームに入所することとなり、借用可能となったため契約を結び、手摺りの設置等の簡易な改修を行い2008年6月に開設された。立地条件に優れかつ市街地や漁村集落に近接することから、2009年11月時点の利用登録者は26名で、4名のスタッフが従事している。

4. 利用者の基本属性と施設利用形態

図3に施設利用者の基本属性を示すが、利用者の年齢は90歳以上の高齢者が2割を占める。次いで80歳代が約5割と最も多く80歳未満は1割を下回る。性別は基幹施設の「清ヶ浜」で男性が約4割と多いが、小規模施設では女性が82%と多い。利用者の介護度と車椅子使用状況は、「清ヶ浜」で要介護3以上が35%を占め介護度の高い利用者の割合が高いのが特徴で、要介護5の利用者が4名ある。また車椅子使用者が約3割を占める。これに対し「えんがわ」と「ひだまり」では要介護3以上は16%で、要介護1・2の利用者が5-6割と多く、次いで要支援1・2が2-3割の割合である。一方「田中さん家」では自立と要支援1・2が6割を占め要介護2以上は1割と少なく、施設により利用者の介護度が大きく異なる。

次に施設の利用回数、入浴サービスの有無と介助形態を図4に示すが、施設の週あたり利用回数は「清ヶ浜」と「田中さん家」では週1回と2回が夫々3割、週3回以上は2割程度である。これに対し「えんがわ」と「ひだまり」では週3回以上の利用者が4-5割を占め、特に週4回以上の利用者が1-2割と利用回数が多い。入浴サービスについては、「田中さん家」では入浴する利用者が3割と少ないのが特徴であるが、その他の施設では大半の利用者が入浴サービスを受けており、「清ヶ浜」では入浴介助(45%)に加え特別浴室利用者の割合(17%)が高い。

5. 施設の利用圏

5.1 広域基幹施設の利用圏

2010年5月時点のデイサービス利用者数は58名で、施設に近い奈古地区が38名、次いで宇田郷(8名)・木与地区(4名)の順で、国道191号沿線の送迎に便利な地点の居住者の利用が多い点が特徴であるが(図5)、「ひだまり」と

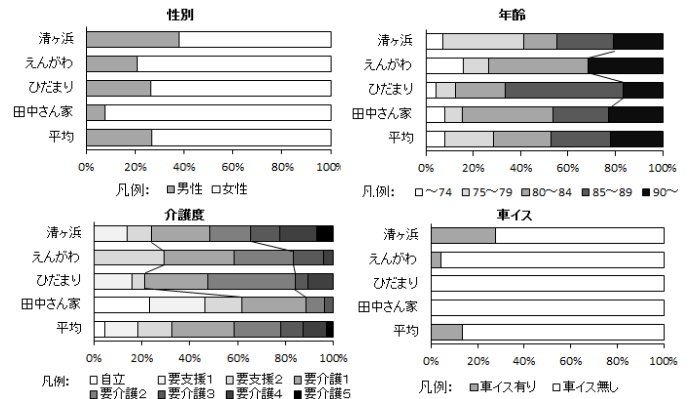


図3 施設利用者の基本属性

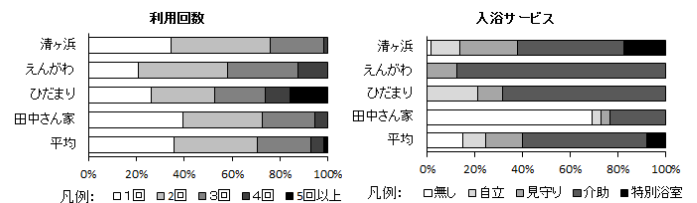


図4 施設の利用回数と入浴サービス

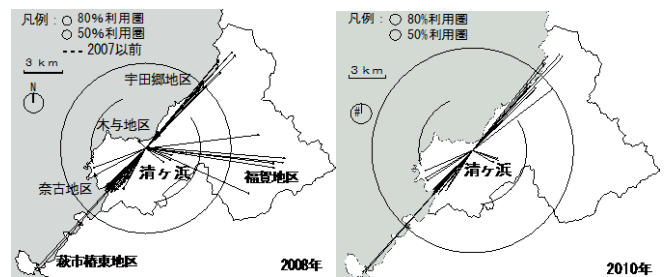


図5 広域基幹施設の利用圏

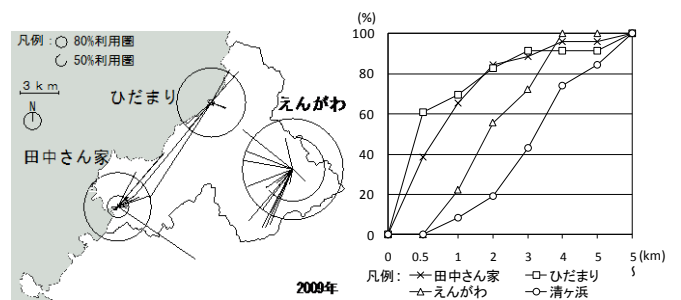


図6 小規模施設の利用圏

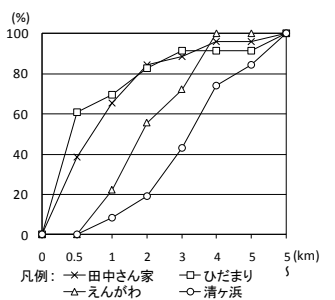


図7 利用距離累計

「田中さん家」開設前(2008年5月時点)の利用者数は89名で、両施設の開設により基幹施設利用人数は減少している。ただし、施設から10.0km離れた宇田郷地区と13.5km離れた萩市椿東地区からの利用者が2割を占めるため、50%利用圏は3.0km、80%利用圏は5.5kmと広い。奈古・宇田郷地区からの利用者は、小規模施設開設以前からの継続利用者と、設備が充実した基幹施設での入浴やリハビリを希望する利用者が中心である。一方送迎に60分以上を要す福賀地区からの利用者は、「えんがわ」開設以

前は6名、開設後の2008年には2名であったが、2010年6月時点では皆無で、「えんがわ」との利用施設の分担が完了している。

5.2 小規模施設の利用圏

福賀地区は小規模集落が広域に分布し、福祉施設が未整備の宇生賀地区からの利用もあり、「えんがわ」は他の2施設と比較すると利用圏が広く、利用者の50%利用圏は2.0kmであるが、80%利用圏は3.5kmで、旧福賀村の全エリアをカバーする施設となっている(図6)。開設後利用者が増加し(現在26名)、施設開設後に4名が基幹施設利用から「えんがわ」利用に変化していることから、ネットワーク構築による利用圏分担効果が認められる。「田中さん家」は町の中心市街地に立地するため利用圏域は狭く、50%利用圏は0.7km、80%利用圏も2.0kmの範囲に収まっている。「ひだまり」も地区の中心漁村集落内に立地するため、50%利用圏は0.2km、80%利用圏も1.5kmの範囲に収まり利用圏が狭い。これより2施設は地区全体というよりは、施設が立地する集落及びその周辺地域に居住する高齢者を主対象とし、デイサービスを提供する施設として機能していることを示している。

6. 結論

1) 施設ネットワークの成立条件として、自治体による広域基幹施設整備と共に新たに社会福祉法人が設立され、高齢者の施設・在宅介護サービスの拠点が確立されていたこと、福祉法人事業として小規模施設の整備が目標設定され、同一法人による全施設の運営が実現したこと、法人が運営する老人ホーム入居者から従前住居の無償借借が出来たこと、高齢者の施設・在宅介護を主事業とする福祉法人のため、高齢者のデイサービスの従事経験があるスタッフを有していたことが挙げられる。

2) 広域基幹施設の「清ヶ浜」では、要介護3以上の介護度の高い高齢者や車椅子使用者の利用が多く、介護設備の水準の高い基幹施設としての役割を担っている。「えんがわ」と「ひだまり」では、「清ヶ浜」と比較すると介護度の高い利用者は少なく、介護度・年齢も様々な利用者で構成されており、両施設とも週2・3回以上の利用が多い。

3) 一方、奈古地区居住の介護度の高い高齢者や車椅子使用者は地区内に立地する「清ヶ浜」を利用するため、「田中さん家」では自立・要支援の高齢者が過半を占め、介護度の高い利用者は少ない。市街地居住の自立・要支援の高齢者が施設の利便性と民家の雰囲気をお好み利用しているものと推察される。このことは施設の空間構成やサービス機能により利用者が施設を選択できる可能性が拡大されたことを示すとともに、基幹施設と小規模施設の機能的役割分担が明快な施設として位置付けられる。

4) 基幹施設からの距離が遠く、アクセス道路が未整備な福賀地区に「えんがわ」が開設され、6名の利用者が「清ヶ浜」から「えんがわ」へ利用施設を変更し利用圏分担が完了し、「えんがわ」ではさらに20名近い新規需要に対応している。この結果、福賀地区の送迎が不要となり、大幅な送迎時間の削減が実現している。

注釈

- 注1) 2008年時点における山口県下20自治体の高齢者サービス充足度(サービス定員/65歳以上高齢者人口×1000)は、県平均は24.4人/千人であるが、阿武町の充足度は37.6人/千人と県下の自治体の中では最も高く、山口県における先進地域として位置付けられる。
- 注2) 2008年5月から2010年6月にかけて数次に渡り、阿武福祉会設立時から運営の中心的役割を担われている特別擁護老人ホーム「恵寿苑」園長を対象にヒアリングを実施した。
- 注3) 実測調査時期は2008年6月26日(ひだまり・田中さん家)、7月24日(えんがわ)、2010年5月31日(清ヶ浜)である。
- 注4) 利用登録者データは、「ひだまり」・「田中さん家」が2009年11月時点、「えんがわ」が2009年12月時点、「清ヶ浜」が2010年5月時点のものである。データ内容は住所・性別・年齢・介護度・痴呆度・車イス使用の有無・週当たり利用回数・入浴の有無等である。
- 注5) 実態調査の期間は清ヶ浜:2010年5月31日-6月5日、えんがわ:2009年12月9-13日、ひだまり:2009年11月16-20日、田中さん家:2009年11月3-7日である。また同期間中に清ヶ浜デイサービスセンター施設長を対象に、2007年以前(えんがわ設立以前)及び2008年時点(えんがわ設立後)の福賀地区の送迎方法・送迎時間に関しヒアリングを実施した。
- 注6) 地域での小規模施設整備計画立案の中心となった、阿武福祉会特別擁護老人ホーム「恵寿苑」園長へのヒアリングによれば、阿武町では高齢化と人口減少が進行しているため、町内には多数の空き家が存在しており、特別擁護老人ホーム「恵寿苑」が開設された2000年以降、福祉会内部において、こうした既存の空き家ストックを活用した小規模なデイサービス施設の設置可能性の検討を開始し、先ず基幹施設からの距離が遠い福賀地区で候補物件を探す作業が始められたとのことである。

参考文献

- 1) 田中裕基他 3名: 自立高齢者の地域生活支援施設のあり方に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, No. 562, pp. 165-172, 2002
- 2) 西野達也・長澤泰: 小規模高齢者通所施設の利用実態と空間の使われ方の特性について, 日本建築学会計画系論文集, No. 581, pp. 41-48, 2004
- 3) 登張絵夢・上野淳他 3名: 利用者の活動からみた通所型高齢者施設の空間構成に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, No. 556, pp. 161-168, 2002
- 4) 菅原麻衣子・藍澤 宏・相羽康宏: 高齢者の主体的活動の展開からみた通所施設の空間整備, 日本建築学会計画系論文集, No. 585, pp. 39-45, 2004
- 5) 西野達也・長澤 泰: 民家型高齢者通所施設の環境行動的意義に関する事例考察に基づく試論, 日本建築学会計画系論文集, No. 586, pp. 37-42, 2004
- 6) 松原茂樹他 4名: 農村地域の宅老所における住まい方の維持・継承について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, E-1 分冊, pp. 173-174, 2006

* 山口大学工学部感性デザイン工学科 学部生

** 山口大学大学院理工学研究科 教授・工博

*** 山口大学大学院理工学研究科 助教・博士(工学)

* Undergraduate, Dep. of KANSEI Design Eng., Faculty of Eng., Yamaguchi Univ.

** Professor, Yamaguchi Univ., Dr.Eng

*** Assistant Professors, Yamaguchi Univ., Dr.Eng.